

第 212 号

ほほえみの会

2020.2.15

「がんの子どものトータルケア研究会静岡」へ参加しました。

24 回目を迎えた今回の研究会では「成長発達途上の小児がん患者が抱える治療の先にあるものとその支援」をテーマに開催された。

小児がんは治療が進み、克服して大人になっている経験者が増えている。そうした人たちの体や心についてのアプローチや支援が重要ということで開かれた。

浜松医科大学と静岡県立こども病院から 4 つの演題報告があった。

- ① 小児がん経験者が健康管理と社会生活を両立し自立に向かうことを親が支えていくプロセス

浜松医科大学 宮城島恭子医師

小児がん経験者の親 19 名の調査をした。退院後は 3 つのカテゴリーに分けられる。最初は合併症や再発への不安持続、次に子供を保護することと子離れの葛藤、そして子供の自立の支えになる。そのプロセスの中で親子間の相互理解を促進する必要がある。

- ② 看護師の調整能力を高めるための復学支援システムの再検討

浜松医科大学付属病院 松浦みらい看護師

大学病院小児病棟では経験の浅い看護師が多く復学支援に関する調整内容が不十分であったため質を高めるための方策を調査分析、検討した。結果、昼カンファレンスを活用した復学支援に関する部署教育システムを構築し取り組むこととした。

- ③ 幼いころからアセントを繰り返した子供の成長

静岡県立こども病院 作田和代チャイルドライフスペシャリスト

5 歳の患者が 2 歳の入院時からの治療や手術について、本人への説明や理解について、患者が自ら必要な情報を積極的に得ることができた症例を基に考察した。母親は最初から娘に病気のことを教えた意思を持っており、薬や点滴では必要性を伝えたいうえで実施、幹細胞移植では紙芝居で説明をした。2 歳の子でも褒めてもらえることが理解を得る要因となった。成長に合わせて理解度を評価し、結果を認め成功体験を繰り返すことが重要である。

- ④ 重度の後頭蓋窩症候群を合併した患児とその家族への支援

静岡県立こども病院 高地貴行医師

髄芽腫摘出後に発症し病状が悪化し、その後回復に向かった女兒を紹介し、状況に応じた家族へのケアや支援が重要だという事例を紹介した。

特別講演

「小児がん経験者の高次脳機能障がい」～理解、支援、そして自立へ～

温井めぐみ 大阪市立総合医療センター医師

小児がん経験者には記憶障がいや注意障がい、遂行機能障がいのほか処理速度の低下、ワーキングメモリーの低下がみられることがある。「頑張っているのにうまくいかない」と感じるときには原因を明らかにして対応をする必要がある。大事なことは自己肯定で、笑顔で褒めることである。

いずれの講演にも共通していたのは家族の理解と前向きな姿勢が大事だということでした。